2017 · 第10辑

日语教育与日本学

Japanese Language Education and Japanese Studies

■日语教育研究 ■日语语言研究 ■日汉语言对比 ■日本文学研究 ■日本文化研究

主　编◎刘晓芳　徐　曙　曹大峰
执行主编◎杜　勤

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

2017 · 第10辑

日语教育与日本学

Japanese Language Education and Japanese Studies

華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS
·上海·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学. 第10辑 / 刘晓芳,徐曙,曹大峰主编. —上海:华东理工大学出版社,2017.10

ISBN 978-7-5628-5157-8

Ⅰ.①日… Ⅱ.①刘…②徐…③曹… Ⅲ.①日语-语言教学-文集②日本-研究-文集 Ⅳ.①H36-53②K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第209220号

责任编辑 / 王一佼 叶聪颖
装帧设计 / 戚亮轩
出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司
地址:上海市梅陇路130号,200237
电话:021-64250306
网址:www.ecustpress.cn
邮箱:zongbianban@ecustpress.cn
印　　刷 / 常熟华顺印刷有限公司
开　　本 / 787mm×1092mm 1/16
印　　张 / 10.25
字　　数 / 246千字
版　　次 / 2017年10月第1版
印　　次 / 2017年10月第1次
定　　价 / 98.00元

版权所有 侵权必究

日语教育与日本学

2017·第10辑

中国日语教学研究会 上海分会 日语教育分会 主办

编委会主任：徐一平
主　　编：刘晓芳　徐　曙　曹大峰
执行主编：杜　勤
编 辑 部：梁　艳　王一佼　叶聪颖

编委会顾问（按姓氏汉语拼音为序）

陈俊森（华中科技大学）
刘金才（北京大学）
宿久高（吉林大学）
文秋芳（北京外国语大学）
修　刚（天津外国语大学）
冈崎眸（茶之水女子大学）
皮细庚（上海外国语大学）
谭晶华（上海外国语大学）
吴寄南（上海国际问题研究所）
张　辉（华东理工大学出版社）

编委会成员（按姓氏汉语拼音为序）

庵功雄（一桥大学）
曹大峰（北京日本学研究中心）
高　宁（华东师范大学）
胡令远（复旦大学）
李晓博（深圳大学）
刘晓芳（同济大学）
毛文伟（上海外国语大学）
潘世圣（华东师范大学）
邱根成（上海对外经贸大学）
盛文忠（上海外国语大学）
王宝平（浙江工商大学）
王婉莹（清华大学）
望月圭子（东京外国语大学）
毋育新（西安外国语大学）
徐敏民（华东师范大学）
徐一平（北京日本学研究中心）
尹　松（华东师范大学）
赵　刚（西安交通大学）
周异夫（吉林大学）
蔡凤林（中央民族大学）
杜　勤（上海理工大学）
侯仁锋（县立广岛大学）
冷丽敏（北京师范大学）
林　洪（北京师范大学）
刘雨珍（南开大学）
潘　钧（北京大学）
钱晓波（东华大学）
杉村泰（名古屋大学）
田野村忠温（大阪大学）
王铁桥（河南大学）
王　勇（浙江工商大学）
吴　川（日本大学）
徐静波（复旦大学）
徐　曙（上海对外经贸大学）
许慈惠（上海外国语大学）
张文丽（西安交通大学）
赵华敏（北京大学）
朱桂荣（北京日本学研究中心）

Japanese Language Education and Japanese Studies

2017 · 10th

sponsored by Shanghai Branch / Japanese Education Branch of China Japanese Education Association

Director of the Editorial Board: Xu Yiping

Chief Editors: Liu Xiaofang Xu Shu Cao Dafeng

Executive Chief Editor: Du Qin

Editorial Staff: Liang Yan Wang Yijiao Ye Congying

Consultants of the Editorial Board (in alphabetical order)

Chen Junsen (Huazhong University of Science and Technology)
Hitomi Okazaki (Ochanomizu University)
Liu Jincai (Peking University)
Pi Xigeng (Shanghai International Studies University)
Su Jiugao (Jilin University)
Tan Jinghua (Shanghai International Studies University)
Wen Qiufang (Beijing Foreign Studies University)
Wu Jinan (Shanghai Institutes For International Studies)
Xiu Gang (Tianjin Foreign Studies University)
Zhang Hui (East China University of Science and Technology Press)

Members of the Editorial Board (in alphabetical order)

Isao Iori (Hitotsubashi University)
Cai Fenglin (Minzu University of China)
Cao Dafeng (Beijing Center for Japanese Studies)
Du Qin (University of Shanghai for Science and Technology)
Gao Ning (East China Normal University)
Hou Renfeng (Hiroshima Prefectural University)
Hu Lingyuan (Fudan University)
Leng Limin (Beijing Normal University)
Li Xiaobo (Shenzhen University)
Lin Hong (Beijing Normal University)
Liu Xiaofang (Tongji University)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Liu Yuzhen (Nankai University)
Mao Wenwei (Shanghai International Studies University)
Pan Jun (Peking University)
Pan Shisheng (East China Normal University)
Qian Xiaobo (Donghua University)
Qiu Gencheng (Shanghai University of International Business and Economics)
Yasushi Sugimura (Nagoya University)
Sheng Wenzhong (Shanghai International Studies University)
Tadaharu Tanomura (Osaka University)
Wang Baoping (Zhejiang Gongshang University)
Wang Tieqiao (Henan University)
Wang Wanying (Tsinghua University)
Wang Yong (Zhejiang Gongshang University)
Keiko Mochizuki (Tokyo University of Foreign Studies)
Wu Chuan (Nihon University)
Wu Yuxin (Xi'an International Studies University)
Xu Jingbo (Fudan University)
Xu Minmin (East China Normal University)
Xu Shu (Shanghai University of International Business and Economics)
Xu Yiping (Beijing Center for Japanese Studies)
Xu Cihui (Shanghai International Studies University)
Yin Song (East China Normal University)
Zhang Wenli (Xi'an Jiaotong University)
Zhao Gang (Xi'an Jiaotong University)
Zhao Huamin (Peking University)
Zhou Yifu (Jilin University)
Zhu Guirong (Beijing Center for Japanese Studies)

卷首语

本刊自 2011 年 5 月创刊至今累计已推出 10 辑，10 辑文集彰显了日语学界资深学者厚积薄发的结晶，展示了年青新锐思想火花的碰撞。从第 5 辑起本刊改为每年出版两辑，以突出本刊的学术性和跨专业跨地区研究的特色，这一办刊决策也得到了华东理工大学出版社的鼎力支持。

为了联袂全国日语教育及日本学研究方面的专家学者办好集刊，积极争取外语教育学和外国学领域同行专家的指导和支持，编委会特邀中日两国 10 位资深学者担任学术顾问，聘请 38 位日语教育学、日本语学、日本文学及翻译、日本文化等方面的专家学者担任编委会成员，并且设立了独立的学刊编辑部，导入了特别约稿和匿名审稿的制度，进一步规范了审稿流程，夯实了办好集刊的组织基础。

第 10 辑共收录论文 14 篇，分成“日语教育研究”“日语语言研究”“日汉语言对比”“日本文学研究”“日本文化研究”五个类别。本辑由中国日语教学研究会日语教育分会承担了组稿工作。为了开阔学术视野，促进国内外最新信息和研究成果的交流，我们向国立国语研究所野田尚史教授特别约稿以外，从中国日语教学研究会上海分会最近承办的“大学日语教育和日本学研究国际研讨会”的投稿论文中精选出上乘之作，并通过各种途径面向全国广泛征稿。在此基础上经过审稿专家的认真审阅、作者的反复修改，最终录用了 14 篇高质量的论文，并精心编辑成册，奉献给关心和从事日语教育及日本学研究的同仁和读者。

今后我们希望继续推出日语教育及日本学其他领域的专辑，不断提高刊用文章的质量和关注度，为提升我国日语教育界的学术实力和影响而努力。

谨对百忙中倾心赐稿的专家学者和辛勤审稿的专家编委表示衷心感谢。

期待学界同仁一如既往的扶持和鼎力相助。

《日语教育与日本学》编委会

2017 年 9 月

目　　录

·日语教育研究·

学習者の習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張 …… 野田尚史(1)
日语语音教学的新趋势——基于《NHK 日本語発音アクセント新辞典》修订研究 …… 刘佳琦(11)
日语专业学习者多义词习得实证研究及教学启示——基于原型范畴理论 …… 钟　勇　朴瑛姬(21)

·日语语言研究·

日语非外来语片假名表记的现状 …… 成芳芳　穆　红(31)
关于副词修饰能力的考察——以「非常に」「ほとんど」「完全に」为对象 …… 疏蒲剑(41)
现代日语书面语无生命主语ニ格被动句研究 …… 张　莉(53)
基于语料库的“AのB”和“A 的なB”的对比研究 …… 陈　旻(66)

·日汉语言对比·

“宅”与“御宅”辨析 …… 张秀梅(77)
日语「Vてある」与汉语“V 有”的考察 …… 黄利斌　李广志(88)

·日本文学研究·

平林初之辅的文艺理论及其在中国的译介与接受 …… 刘晓芳　蔡　蕾(99)
道浦母都子论——摇曳的“我”、矛盾的“我” …… 朱卫红(111)
非典型的控诉与抵抗 ——日本战后“第三批新人”战争题材文学作品略论 …… 史　军　马丽丽(118)
解读田边圣子与现代女性作家——以女性主义为视角 …… 张　锐(128)

·日本文化研究·

试论森有礼的道德教育观——以“兵式体操”为中心 …… 张 杰(136)

英文摘要 …… (146)

Table of Contents

• The Study of Japanese Teaching and Learning •

Widening Japanese Grammar Teaching Based on the Investigation on Learners' Acquisition Difficulties ····· *Hisashi Noda* (1)

The New Tendency of Japanese Pronunciation Teaching ····· *Liu Jiaqi* (11)

An Empirical Study on the Acquisition of Polysemous Words of Japanese Majors and Implications for Teaching: Based on Prototype Theory ····· *Zhong Yong; Piao Yingji* (21)

• The Study of Japanese Language •

The reality of the katakana transcription of non-loan word ····· *Cheng Fangfang; Mu Hong* (31)

A Research about Modification Abilities of Adverbs: Taking "hijouni" "hotondo" and "kanzenni" as the Research Object ····· *Shu Pujian* (41)

Ni-passive with Inanimate Subjects in Contemporary Written Japanese ····· *Zhang Li* (53)

The Study of "AのB" and "A的なB" based on Corpus ····· *Chen Min* (66)

• The Contrastive Study of Japanese and Chinese Language •

Analysis of "Zhai (indoorsy)" and "Otaku" ····· *Zhang Xiumei* (77)

A Contrastive Study of Chinese "V-you" and Japanese "V-tearu" ····· *Huang Libin; Li Guangzhi* (88)

· The Study of Japanese Literature ·

Hirabayashi Hatsunosuke's Literary Theory and Its Translation and Reception in China …… *Liu Xiaofang*; *Cai Lei* (99)

On Michiuramotoko's Tanka poems—Fluttering of the Self, Contradictions of the Self …… *Zhu Weihong* (111)

The nontypical condemnation and opposition — On the literature works about war by the Japanese post-WWII Third Generation writers …… *Shi Jun*; *Ma Lili* (118)

Interpreting Tianbianshengzi and modern female writers — From the perspective of Feminism …… *Zhang Rui* (128)

· The Study of Japanese Culture ·

Study on Arinori Mori's View of Moral Education — with the Focus on Military Gymnastics …… *Zhang Jie* (136)

English abstracts …… (146)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

学習者の習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張[①]

日本国立国語研究所　野田尚史

［要　旨］この論文では、学習者にとって習得が困難な点を調査し、それに基づいて(a)から(d)のように日本語教育文法を拡張する必要があることを示す。

(a)「聞く」ための文法では、「～に作る」の「～に」のような述語にとって必須ではない格成分も重視する。

(b)「話す」ための文法では、「何というか」や「そうそうそう」のような典型的とは言えないフィラーやあいづちも重視する。

(c)「読む」ための文法では、「こととする」や「とされる」のような典型的とは言えないモダリティ形式も重視する。

(d)「書く」ための文法では、丁寧形と普通形を混ぜて使うような典型的とは言えない丁寧形と普通形の使い分けも重視する。

［キーワード］格；フィラー；あいづち；モダリティ；丁寧形

1　この論文の目的と構成

日本語教育と日本語学の文法の関係は、これまでは日本語学の文法に基づいて日本語教育を行うという方向が普通であった。しかし、これから日本語教育をさらに発展させるためには、それだけではなく、日本語教育で得られた知見に基づいて日本語教育のための文法を作るという方向も考えていかなければならない。

この論文では、日本語学習者にとって習得が困難な点を調査し、それに基づいて日本語教育のための文法で扱う範囲を拡張する必要があることを示す。

---

① この論文は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」とJSPS科研費15H01884の研究成果を含んでいる。

この論文の構成は、次のとおりである。まず、次の2で日本語教育と日本語学の文法の関係を整理する。その後、3から6で、「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの言語活動で習得が困難な点を調査した結果から日本語教育文法を拡張する必要性を、例を挙げながら説明する。最後に、7でまとめを行い、今後の課題についても述べる。

2　日本語教育と日本語学の文法の関係

言語教育と文法の関係は、どの時代のどの言語の教育でも、文法に基づいて教育を行うのが普通であった。日本語教育でも、日本語学(国語学)の文法に基づいて教育内容を決め、教育を行うことが多かった。どの言語でも、一般に、文法の記述が先に行われ、そのあと体系的な言語教育が始まったからだろう。

しかし、日本語教育を行う目的と日本語学の文法を作る目的は大きく違う。日本語教育の目的は、非母語話者が日本語でコミュニケーションを行う能力を高めることである。一方、日本語学の文法の目的は、できるだけ洗練された少ない規則で文法現象を記述することである。日本語教育と日本語学の文法では目的が違うので、日本語学で作られた文法をそのまま日本語教育で使うのは弊害が多い。

これから日本語教育をさらに発展させるためには、日本語学の文法に基づくのではない形で、日本語教育で本当に必要な日本語教育のための文法を作ることが重要になってくる。

日本語教育では、非母語話者が日本語で「聞く」「話す」「読む」「書く」という実際の言語活動を行えるようにするために、それぞれの言語活動に合わせた教育を行っている。一方、日本語学の文法では、できるだけ洗練された少ない規則で文法現象を記述するために、「聞く」「話す」「読む」「書く」という実際の言語活動を考慮しないようにしている。そのような違いがあるため、日本語学の文法には入っていないが、日本語教育の文法としては必要な項目がかなりありそうである。

次の3から6では、「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの言語活動で習得が困難な点を調査した結果に基づいて日本語教育文法を拡張する例を示す。

3　「聞く」ときの習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張

格助詞「が」「を」「に」などで表される「格」の問題は、日本語学(国語学)の文法で古くから研究が行われてきたものであり、十分な研究成果が蓄積されている。そのため、日本語教育でも非常に重要な文法項目として取り上げられ、十分な教育が行われている。

しかし、学習者が日本語を聞くとき、「格」の問題で適切に意味が理解できないことがある。

たとえば、野田尚史・阪上彩子・中山英治(2015)には、学習者が(1)の「お母さんに作った」の意味を適切に理解できなかった例が挙がっている。下線部分の「お母さんに作った」は「(私が)お母さんに作った」という意味だが、学習者はそれを「お母さんが作った」という意味だと理解したということである。

(1) 私もなんかケーキ作ったのに、スポンジがぜんぜん膨らまなくて、それ、ペチャーってしてて、そう、すっごいそれ、なんか、お母さんに作ったのに、なんでみたいな、なんでこうなったのみたいな感じになって、恥ずかしかったことある、1回。

これは英語を母語とする学習者の例であるが、中国語を母語とする学習者でもこのようなことはよくあると考えられる。

学習者は、話すときには格助詞に気をつけていることが多い。それに比べ、聞くときには格助詞にあまり注意を向けていないことが多いようである。たとえば(2)では、格助詞に注意を向けなくても、動詞「作った」と「私」と「ケーキ」の関係から、「私」が作った人(動作主)であり、「ケーキ」が作ったもの(対象)だということがわかる。

(2) 私がケーキを作ったの。

そのようなことが多いので、聞くときには格助詞にあまり注意を向けないことが多くなるのだろう。

格助詞の中でも「が」や「を」は、格助詞を聞かなくても、格助詞の前の名詞と動詞との格関係がわかることが多い。動詞が「作る」であり、その前に名詞が2つ出てきている場合、人を表す名詞は動作主を表し、物を表す名詞は対象を表していることが多い。

実際、話しことばでは、(3)のように「が」や「を」が使われないことも多い。「が」や「を」がなくても、格関係がわかるからである。

(3) 私、ケーキ作ったの。

それに対して、格助詞「に」や「で」はさまざまな意味を持っている。人を表す名詞に「に」が付いた場合だけを考えても、「に」にはたとえば(4)から(9)のような意味がある。

(1)の「お母さんに作った」の「に」は(8)の「に」である。

(4)　与える相手:「山田さんに誕生日プレゼントをあげた。」
(5)　動作が及ぶ相手:「田中さんにどちらがよいか尋ねた。」
(6)　状態の主体:「私にはそんな文章は書けない。」
(7)　受身の動作主:「彼に誘われた。」
(8)　利益を与える相手:「妹にネックレスを買った。」
(9)　判断の基準:「この靴は私には小さすぎる。」

このうち(4)から(6)のような「に」は述語にとって必須の格成分である。このような「に」は、(7)のような「に」とともに、日本語学の文法で重視され、日本語教育でも十分取り上げられている。しかし、(8)や(9)のような「に」は述語にとって必須の格成分ではないため、日本語学の文法でも日本語教育でもあまり取り上げられてこなかった。

(8)の「に」は述語が「作る」や「買う」のときに限って使われるものであり、(9)の「に」は述語が「小さい」や「便利だ」のような形容詞系の述語のときに限って使われるものである。

日本語教育文法では、特に「聞く」ときに重要なこととして、述語にとって必須ではない格成分、つまり(8)や(9)の「に」のような周辺的な格成分も重視する必要がある。人を表す名詞が出てきたら、それを機械的に動作主だとは考えないで、名詞の後の「に」が付いていないかを意識しなければならない。そして、「に」が付いている場合は述語を勘案して、「～に」が述語に対してどのような格関係にあるかを判断する必要がある。

4　「話す」ときの習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張

「あの」や「ええと」のようなフィラーや、「ええ」「そうですか」のようなあいづちは、話しことばにしか現れないこともあり、長い間ほとんど研究が行われていなかったが、最近になって研究が盛んになってきている。日本語教育でも、少しずつ取り上げられるようになってきている。

しかし、学習者が日本語を話すとき、フィラーやあいづちを適切に使えないことがある。

たとえば、野田尚史(2015)には、適切なことばがすぐに思いつかずにことばを探しているとき、中国語話者が「何というか」ではなく、下線部分のように「何という」を使った(10)の例が挙がっている。

(10) えーっと、農場を作ること、〈あー、農場を作ることですか、あ、そうですか〉今、やっぱり夢けど、でも、農場を作りたいね、中国の場合はね、今農業の問題は日本の農業を見ると、同じの問題ね、〈んー〉別々、〈んー〉別、家ずつ、小さい畑を〈んーんー〉もっているね、そうすると、肥料とかたねとかね、〈うん〉あのー、世帯ずつ、〈うん〉買います、〈うん〉そうするとちょっとたいへんね、〈んーんー〉あ、やっぱり、中国のそんな広い畑で、〈んー〉アメリカとカナダのように、〈んー〉おお、あの、何という、超大型農業を〈んー〉やればいいと思います　(KYコーパス、中国語話者、上級　CA03)

KYコーパス全体を調査した野田尚史(2015)によると、韓国語話者に比べ、中国語話者は「何というか」を使うのが適切なところで「何という」を使うことが多いということである。

また、野田尚史(2015)には、中国語話者が「そうそうそう」というあいづちを使った(11)の例が挙がっている。日本語話者Tの「京都も古いですよねえ」に対して中国語話者Sが「そうそうそう」を使った例である。

(11) T：うんうん、うん、あのセーアンも、シーアンも、〈うん〉古い町ですねえ。
S：そうです。
T：ねえ、京都も古いですよねえ。
S：そうそうそう。
T：あの似ていますか、だいぶ違いますか。
(KYコーパス、中国語話者、中級－下　CIL03)

「そうそうそう」は、自分が相手と同じか、それ以上によく知っていることや強く思っていることについて強く同意するときに使うものである。

(11)では、中国語話者Sが日本語話者Tと同じか、それ以上に「京都が古い」ことをよく知っているわけではないはずである。また、京都が古いことは一般的な常識であり、それについて強く同意する必要もない。「そうそうそう」を使うと、相手は「そんな当たり前のことについて、『私もそう思う』と、わざわざ強く言わなくてもいいのに」と思う可能性がある。

さらに、「そうそうそう」は、「です」「ます」を使うような初対面の年上の相手には、普通は使わない。そのような相手に「そうそうそう」を使うと、相手は「なれなれしい」と感じる可能性がある。

フィラーの中でも「あの」や「ええと」、あいづちの中でも「ええ」や「そうですか」のようなものは典型的なフィラーやあいづちとして、研究が比較的盛んに行われており、日本語教育で扱われることもある。それに対して、「何というか」や「何だっけ」のようなフィラー、「そうそうそう」「なるほど」のようなあいづちは典型的なフィラーやあいづちだとは考えられていないため、研究が少なく、日本語教育でもほとんど扱われていない。

しかし、典型的とは言えない周辺的なこのようなフィラーやあいづちも日本語教育では重要であり、日本語教育文法で積極的に取り上げる必要がある。その場合、フィラーやあいづちという文法的なカテゴリーとして整理するのではなく、「適切なことばがすぐに思いつかずにことばを探しているとき使う表現」や「相手の発言に強く同意するときの表現」というように、話すときに使う表現として、機能別に整理するほうが学習者には役立つだろう。

5 「読む」ときの習得困難点調査に基づく日本語教育文法の拡張

「らしい」や「のだ」「ね」のようなモダリティの研究は、この30年くらいの間に大きく進展してきた。日本語教育でも、「てください」「てもいい」「かもしれない」「のだ」など、さまざまなモダリティ形式が重要な文法項目として取り上げられ、十分な教育が行われている。

しかし、学習者が日本語を読むとき、モダリティの問題で適切に意味が理解できないことがある。

たとえば、野田尚史・花田敦子・藤原未雪(2017予定)には、中国語を母語とする上級学習者が学術論文の一部である(12)の下線部分「明らかにすることとした」の意味を適切に理解できなかった例が挙がっている。「～明らかにすることとした」は研究目的を述べている文であるが、学習者はそれを「～明らかになった」という意味だと理解したということである。つまり、研究目的ではなく、研究結果を述べている文だと理解したのである。

(12) そこで本研究では、フライアッシュおよび高炉スラグの組合せによるコンクリートの「基本性能」と「ローカーボン」の最適化を図るための基礎的な情報を得るために、フライアッシュおよび高炉スラグの組み合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com